

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷六十三第

行發日一月一年八和昭

新年特別號

インフレーションと財政策	法學博士 神戸 正雄
人口に關する小論	文學博士 高田 保馬
社會的に妥當なる農業經營規模に關する	經濟學士 八木芳之助
ベルンハルデイの見解	經濟學士 大塚 一朗
操短と生産費	經濟學士 柴田 敬
資本論と一般均衡論	經濟學士 松岡 孝兒
中央銀行役割の發展に就いて	經濟學士 中谷 實
預金通貨の貨幣的性質に就て	法學博士 財部 靜治
ケトレー直後の英佛統計學	經濟學博士 本庄榮治郎
土佐の育子策について	經濟學博士 谷口 吉彦
爲替心理説の批判	經濟學士 堀江 保藏
宇和島藩の蠟專賣	經濟學博士 石川 興二
琉球農村共同體 <small>と我國民理想としての</small> 『國民共同體』	經濟學博士 沙見 三郎
地方財政の改革	經濟學士 蛭川 虎三
漁業組合論	經濟學博士 小島昌太郎
二ツのインフレーション	
新着外國經濟雜誌主要論題	

(禁轉載)

ケトレー直後の英佛統計學

財 部 靜 治

一

明治より大正に及び、本邦統計學界に多大の影響を與へたる Max Haushofer の統計學教科書が、一八八二年の再版にありても尙英佛輓近統計學派として告ぐる所は、爾來半世紀を経過せる今日に於ても普通にその名稱により通用する所なれど、そは古りにし面影なきにしも非ず、さり乍ら恰もその中に取扱はるる初期時代に於ける、英佛統計學界の概況及諸學者に就きては、大正以降に於ける本邦統計學の主潮が、獨逸學風を重んじたるがためか、紹介せらるること割合に尠く、特に世界大戰期の獨逸統計學に親しめる者に、その嫌ひ多きに似たり、そは兎も角とし自ら顧みて過去三十年攻學の跡を察するに、此方面に於て先蹤を尋ねし所幾何も存せざるを懷ひ、汗顔之を久しうす、今正に「道德統計」發祥後百歳の佳辰を迎ふるに當り舊著「ケトレーの研究」に於ける統計學の沿革に、一補遺を加ふるの趣旨により此拙稿を草す。若し夫れ題名中「ケトレー直後」と謂へるに就きては、一片の斷りなき能はず、蓋しケトレー歿せるは一八七四年にあり、從ひて之を死後の意と解しなば、叙說の中心は寧ろ前世紀末四半紀に歸すべきも、意圖する所は斯

人の大著「人間論」公刊を觀たる一八三五年以後、大體に前世紀中葉に及ぶべき一期に存すればなり、要するにこは一面統計學に貢獻せる氏が一生の閱歷にも、相當の顧慮を拂ひつつ、主として同著により學界に及ぼされたる大影響を、重視せる結果に外ならず、讀者の諒恕を仰ぎ得ば幸なり。

二

甲論乙駁紛々たる統計學説を剖析して、平明に傳義せる點に非凡の才を發揮せりとすべき Nizck が、その著統計學原理中所謂軌近統計學に就き、古官廳統計、古大學派及政治算術てふ統計學古往の三流を本とし、そが如何にして形成されしかに關し、大觀せる所は先づ一顧するの値あり、惟へらく右三派は次の脈絡に於て合流するに至れり。

一、統計とは大量現象の計數的會得の意なりと解す、その他何れかの事項例令ば國家及行政の施設につきての説明的記事文は統計學に非ず、此本旨に基づき方法論上の統一的基本として、統計法は大量現象の計數的會得とすべきことを生ず。

二、統計學は事實を査定するのみならず、常例及常理をも亦究むべきものとす、敘事的職分のみならず解析的職分も亦その本領なり。

三、國家行政の時需を以て決定的とすべきのみならず、學問及人口の希求をも亦充たすために育成さるべし、從ひて社會生活を諸方面に向ひて究むることとし、あらゆる利害關係者を満足せしむることを期すべし。

所謂輓近統計學は此根基上に構成せられたり、統計當路者としての官廳統計家及私統計家を迎ふべき、統一的研究範圍は茲に起れり、素より個別の舊派は輓近統計學に遷り行くに際し、新たに採長し又放棄せるもの尠からず、(1)此點に付政治算術家は元來動かさること最も尠し、蓋しそは元來輓近に於ける新統計學の意味に於て研究したればなり、從ひてそは純眞の先驅者たり、(2)古官廳統計は夙に大量現象の計數的會得を扶育したるも、別にその解析的職分をその掌中に收め、かくて由來その國家行政の需求に限られたる目論見を擴大するの要ありき、詳言すれば新たに學問及人口の希求を充たすため之が育成に努むるの必要を告げたり、(3)輓近の新統計學と最もかけ離れたるは大學統計學派なり、同派が新原則に順應しかくて輓近統計學に進み得たるは部分的に過ぎず、その道統を進め大量現象のみならず、一國の全狀態及全施設の記事を保育せんとせる程度に於ては、蹴らるるの外なかりき、かくて輓近統計學に疎遠となれる所は、國誌、諸國誌特に政治地理に變り行きたり¹⁾。

以上殆んど全く原文の字句を追ひ Zizek の所説を紹介せるか、試みに之を政治算術に關する拙稿(特に本誌前卷第四號分)に照すに、獨逸統計學者中部分的に異論を挿む者あるべきや、察するに難からずと雖も、大體に穩健なる見解となすを得べく、特に右の合流引導の機を捉へし者、ケトレーに存することを特記すべきや謂ふ迄もなし。

佛の統計學は一面より評せんか、一部はケトレー以前に一部は之と時を同じくして、ケトレー

1) cf Zizek, Grundriss der Statistik. 2. A. 23 SS. 19. 20.

が極めて花々しく展開せる方法を、最も熱心に育成したるの功績を有すと謂ふべし、即ち佛の學者は古くより數に重きをおきたり、若しその諸定義を窺はんか、數は凡てなりとせらるるの狀あるを信するに至らん、例やば夙に Guerry (以下三學者に就きては後段に於て別々に再説すべし) は謂へり「統計學は本來可變なる諸元素の適法計上 l'enumeration méthodique より成り、由りてその平均を決定す」と、次いで Dufau (一八四〇) は之を定義して「社會事實の同種系列を本とし、その事實繼起の法則 les lois de la succession を歸結すべき學問」なりとし、「その事實は計數系列 termes numériques の形により示さるを要す」と附言したり、(Traité, pp. 35, 36.) 又 Moreau de Jonnés (一八四七) は謂へり、「統計學は計數系列として示されたる社會事實の學問なり」(Éléments, I. éd. p. 2) かくて Haushofer をして佛人特に Dufau 及 Moreau de Jonnés が、叙事に於ける計數使用に重心をおけるは、統計法を忘るるものにして、古尙表統計への追憶なりと評せしめ、又 Walker をして是等學者が、統計學に計數使用のみを又は殆んどそれのみを許さんとせるも、この觀念は迷誤と認められてより久し、統計學は必要に應じ文言、數字、表、一色又多色の圖表々章、浮ぼり地圖等を驅使して究むべしと評せしめたるも、その評當れるや否やは知らず、唯之を刊本に徵するに、事實上に於ては是等の學者も、敢て短しとせざる説明文句を計數に附することを免がれ兼ねたり、特にその述作に「歴史派」たる性質を、最も濃厚に帯べる Moreau de Jonnés にありては然り、彼は常にケトラー、ゲーラー、フアイエー (Hausling) の佛國統計學文献史二七頁によるに數學教授たりし Fayet は

一八四五年 *Essai sur la Statistique intellectuelle et morale de la France* を著し、特に氣候、人口の密度及集積、教育により、犯罪比率に及ぼす影響を決定せんとしたり) デュフォール等の學説及研究を嘲り又抗論せるも、之に附せる一論旨は著しく薄弱なりき、即ちそれは計數系列が官廳公利物以外に用ゐられずとするの主張なるも、こは證據を伴はざる一否定に外ならず²⁾。然るに英にありては、有名なる倫敦統計學會は、數を以て統計學助成方便の一つ視する者と、之を第一線に立つる者との二見解間に於て、媒介的見地 *combinaison rationnelle* に立つことを簡明に表白したり、即ち同學會が一八三八年その綱領³⁾として掲げし所によるに (*Journal Vol. I, 1839* 参照) 一面統計學の目的に關し、そは諸事實の原因結果を窮むべきものとは想はざるも、演繹推理に屬し從ひて單純なる表及計數視すべからざるものを、悉く斥ぞけんとする者に非ず、唯一切の結論を下すためには、明確なる事實の根據と數學的立證を許すこととを必要視すとし、頗る巧妙なる態度に出でしと共に、事實は通例數の形をとるも是等の數は屢々説明を必要とすべきことを表明したり³⁾。

統計學が經濟及社會事實を取扱ふや、政治事實を取扱ふやは、學者が永く一致を見ざりし第二論點なるが、前世紀の第二三分期にありては、之を政治統計とし國の富強叙説とするの意見強かりしも、次いで經濟的社會的觀點は漸次その地歩を占むるに至れり、夙に第十八世紀の末蘇格蘭の J. Sinclair (*The Statistical Account of Scotland. 27 Vols., 1791-99*) は率先してかかる研究に當りしが、その後一八四〇年 Dufau はその統計學論中、特に從來政治算術と呼ばれたる局部知識を開拓し、統

2) cf Block, *Traité théorique et pratique de Statistique*. 2. éd. '86. pp. 17, 18; Huoshofer, *Statistik*, 2. A. '82 S. 17; Walcker, *Gmundriss der Statistik*, '89 S. 12.

3) cf Block, *op. cit.*, p. 18; Meitzen, *Geschichte, Theorie, u. Technik der Statistik*, 2. A. '03 S. 53.

計學の社會的方面を明かにしたり、又 Moreau de Jonnés は四七年の原論中言へり、統計學が社會事實の學たるは眞なりと、(されど一八五六年の再版にありては、聊か曖昧を宿し、自然の範圍に餘りに深く立入り、統計學を以て「計數系列により言表はせる自然的、社會的又は政治的事實の學問」とせり、現にその書名中にも特に *Avec son application a la constatation des faits naturels* と附記したり)されど彼は自ら使用せる言葉の意義に付明かに忠實ならず、その研究上社會よりも寧ろ國家の記述に逸脱したり、疑ふべくもなく彼は言へり、「統計學は歴史の如く國民生活の外面的諸事件を拾ふ代りに、その民事及内面生活を討究し、社會經濟の神秘元素を發見せんと努む、殆んど常に戰爭及侵略の記事に、興味を集中すべき歴史に反し、統計學は特に平和のドアンフナー惠澤を究む」と、「神秘の元素」「平和の惠澤」と言へるが如きは、著者が文言を飾る以外に何物をも求めざるを證すその外同じ原論二頁に示さるる之が他の一證あり、即ち彼は「道德及智能統計」を斥ぞけ、それは「その使用に係る名目を値ひせざればなり」とせり、而してそれが統計學てふ名目を値ひせざるは何の理由によるとせるぞ、「精神及感激に計算を施さんと欲し、かくて確定し比較適性ある單位に於けると同様、精神の働及人の智能現象を勘定せんとするの試みは、無益なる業なればなり」とせり、察すべし彼はかく説けるに當り、眼中何を宿せるかを、それは Dufau 及 Quételet に挑戦せんとして急なるを餘り、自己の下せる定義と矛盾の結果に陥れることに過ぎず⁴⁾。

ケトレーの行動及述作により、社會統計特に道德統計の範圍に及ぼされたる刺戟は恰も甚大な

4) cf. v. Mayr, *Theoretische Statistik*, 2. A.S. 329; Block, *op. cit.*, pp. 93-94 (本邦にても普ねく利用されし、v. Scheel の同書獨譯59頁の所説は、原文に照し輕からざる齟齬あり、同譯が原書初版によれる結果乎非乎)

り、Westergaard がその近著統計學史中（本誌前號參照）前世紀の後半を萬國會議時代及末期の數百年に分てるに對し、一八三〇乃至四九年を熱中時代 The Era of Enthusiasm とせるは、學史紀別としての之が適否は兎も角とし、その名稱により巧みに同時代の一特色を捉へ得たりとすべき所なるか、ケトレーは此時運を馴致するにも預りて力ありき。而も亦氏の影響が及ぼされたる深度に就きては、英佛の兩國何れも特別の考察を要すとすべきものありき、特に佛にありては恰も前記の諸統計學者を初めとし Guillard, Legoyt, Maurice Block 等は、道德統計研究上ケトレーにより重視されしが如き、原理的問題を問はず、或は多かれ少かれその問題より遠ざかりたり、夙に二世紀以前に Grant 及 Petty 起り、次いで多數の學者統計的研究に當りし英にては晩近統計學派は同様に益々多數の祖述者を得たり、されどその研究は依然として特に實際目的のために盡すの風を續け、從ひて又新方面への發展上獨及佛に於けると同様なる影響は何はれざりき、英國統計學の長所は特に政治生活につきての豪華なる計數的舉證、商政、租稅、救貧制等のためにする材料及事實蒐集に當るの勵精に存したり、從ひて同國にありては獨及伊に於て尠からずケトレー道徳統計學理の熱心なる祖述者を出だせるが如くならざりしも、皆無なりとはせざりき、（ケトレーの研究一五四頁以下參照、唯統計法の理論に關し、ケトレー一八四六年の著書簡集が、越えて三年後に英譯されしことは特に注意するの要あり）J. S. Mill（その著論理學中）現に英の哲學者例令ば Cornwall Lewis（本誌第三十二卷第一號所載歐文統計學書目錄參照）J. W. Draper（History of the Intellectual Development of Europe. 2 vols. 1862.）W. F.

Hartpole Lecky (History of European Morals 2 vols. 1869; History of the Rise and Influence of the Spirit of Rationalism in Europe, 1865 本書獨譯に Rationalism を Aufklärung とすることを特に附記す。) は是等の問題につき單に斷片的に意見を述ぶるに過ぎず、一面その本分として任じたる英の統計家例令は Neison, Porter, Farr 等は、多くは材料蒐集に甘んじ、之を國民の福祉目的に利用したり、就中 Porter の著書「國民の進歩」中には後に説くが如くその初版以來道德進歩に關する一編を含み、佛國に於ける發展經路を偲ばしむる點に於て出色たり、理論的問題に割合に詳しく觸れたるも、遂にケトリーの亞流視すべきことなかりき、獨り H. Th. Buckle (一八二二—六二、その著 History of Civilization in England 第一卷は

一八五七年に出づ、——第二卷一八六一年——その文態雄勁にして構想頗る大膽なりしたため、歐米人の耳目を聳動せしめ、無名の著者は一躍して令名噴々たり、Mill, Comte による獨譯五卷並に一八八一年迄に六版を重ねたる A. Kuge による獨譯二卷あるによりても、一斑を察するに足る、著者が主力を傾注したる論旨は、氣候、土壤、食物及自然の諸相を以て、智能的進歩の決定因子視するにあり、Malthus が Paley 經濟字書中斯人に就き説く所によるに、富家の子弟として恵まれたる著者は、學徒としての隱遁生活を送り、一大歴史起草に専心し、四十一歳にして夭折せるに當り、未完の儘之を遺したり、同書緒論中人の諸行動が、統計により立證され得べき諸法則に則るとの原理が、バックルにより最も明晰又揚然たる態度の下に吐露」されしは、Mill, Logic, bk. v. ch. iii. 中に説けるが如し、尤もミル自身は人の道德的諸性質が、少しも改良さるゝを得ず、社會の進歩を少しも助けずとするの意見に、同意するを肯んぜざりき) はケトリーの厄介兒 enfant terrible とし

て、英の土地にその社會物理的世界觀を、歴史哲學の目的上利用せんとせる唯一の人なり、而も壯年時代の客氣に驅られたる點も存すとすべきものなるが、専門統計的研究とすべきものを缺き、計數の生嚙りの舉證に甘んじ、事物の奥儀を進みて思辯することなかりき、こは等しく歴史哲學

を究め乍ら、世變に於ける神意の支配を確信し、而も人間存する限り神は長久なり、*God ist der Menschheit immanent* その神のみ世界史の解釋を下すべきも、その神自身は秩序、正義及進歩を護るの神たることを條件とすとせる、*F. Laurent* の人間史研究第十八卷 *Philosophie de l'histoire*, 1870と大にその選を異にせる所なり。若し夫れ廣く認められ又大に嘆賞されたる *Herbert Spencer* は、その社會學的諸述作並に又個人主義的道德を鼓吹せる *Data of ethics* に於て、引證多方面に及べる該括的著書を、社會物理的基礎に於て、否一層適切に説かば生物學的社會觀に本づきても亦打立てんと試みたれど、適法精微の統計觀察に關する各理解は持合せざりき、彼が特にその浩瀚なる叙事社會學中に収録せる叙説は、部分的には旅行記より汲める諸實例の備忘録的纂脩に馳せ、そは他面に於ける綜合哲學的演繹に趨れるの嫌ひと、兩々對立するものあり、就中後者はダーウイン主義の類推應用により、動物界及野蠻なる原民族の畑より、人間界の實際有機體を築き上ぐることに存したり。唯時代を少しく後世に及ぼして考ふれば、*Galton* に就きケトレーの影響淺からざるを窺ひ得べきも、そはその道德統計的理論に於て然りとはなし得ざると共に、同人を重視すべきは、寧ろ統計學史上の新人物として、後世に大影響を及ぼせる點にあり、そは寧ろ別稿に於て詳論するを可とすべき所なり。⁵⁾

道德統計論に關するケトレーの道統を釋ぬると共に、之に關聯して追懷さるべきは佛の法曹家 *A. M. Guerry* なり、同學者は奇怪にも該博を以て推さるる、*v. Mohl* の文献史中に擧げられず

5) cf. *Öttingen*, *Die Moralstatistik*, 3. A. 82. SS. 28-30; *Morpurgo*, *Die Statistik und die Socialwissenschaften*, 77 SS. 75. 76; *Hanshofer*. op. cit., SS. 23. 24.

と雖も、ケトラーの人間論以前に於て、佛國學士院より授賞されたるその最初の述作佛蘭西道德統計論 *Essai sur la Statistique morale de la France*. Ouvrage qui a obtenu le prix de statistique décerné en 1833 par l'académie royale des sciences, 1833 により、「道德統計」てふ名目は初めて採用されたり、尤も氏はその以前に數年來官廳的良編次を整へて、公けにされたる佛國刑事統計を料とし、A. Balbi との共著になれる教育及犯罪比較統計論 *Statistique comparée de l'état de l'instruction et du nombre des crimes, 1829* を發表せるも、重視せらるることなかりき、次いで多年經過後地圖表によれる大著 (本の大きよりするもニツ切大版型なり) 即ち *Statistique morale de l'Angleterre comparée avec la statistique morale de la France, 1864* (その緒論中道德學に於ける計數應用の歴史を含む) と題せるものにより、氏は重ねて賞を受け又眞に著名となれり、緒言 (p. XLVI) 中「計算に訴へたる諸事實の逐次更改」*Les transformations successives des faits par le calcul* を示すべき解析統計 *Statistique analytique* につき、自から原則視せる所を説けり、氏は謂はば「道德解析」の創基者なり、之につき氏の觀する所によるに、「諸平均價值に引直し又系列として配列されたる、道德事態の諸事實に計數的解析を應用し、依りてその發展及その相互交聯に關する、法則の制律を明かにす」としたり、かくてその研究上道德の軌範 *was sein soll* を説くは、その意圖する所にあらず、寧ろ道德に關する有りの儘の事實關聯を究め、依りてその統計的研究により「哲學の經驗的基礎」*la base expérimentale de la philosophie* (p. LVIII) を築かんとしたり、同著中特に犯罪を取扱へるも、之に關する

氏の定義中には他の諸題目例令ば自殺、私生、慈善及教育を含みたり、(尙本誌第十九卷八四九頁以下参照) 唯別に尙「斯學否寧ろ此叙說方法は、諸觀念、諸感情、諸精神能力をその外面的表現によらず、却つて直接觀察の識域に羅致し得べき程度に於て考察しつゝ、道德及智能界の事實全部に應用せらるゝ、思惟の表現視さるべきものも之を不問に附せず」(p. XLV)とせるや、その研究の効果を過信したりと謂ふ可し、要するに統計的研究上氏は道德統計の専門家たりしに過ぎず、之と殆んど同時に道德統計にも究め及ぼしたるケトレー同様、社會生活の該括的統計考察に當ることなりしも、率先して右の新名目を提唱し、又社會大量現象の意義ある新項目を、統計學の範圍に入れたる點に於て、著大の進歩を促せりと謂ふべし。

人體計量はケトレーが好みて研究せる題目の一なり、而して法則の歸結を急ぎし嫌は、此範圍に於ても示されたり、されど氏及其の當時の諸學者による、所謂道德統計研究上の諸結論は、一層甚しく怪しげにして氣輕の研究 light-hearted investigation と評すべきものありき、現に英蘭に於ける F. G. P. Nelson (Statistics of Crime in England and Wales for the years 1834-44. Journ. Stat. Soc. XI, 48. 犯罪と教育との照應を發見せんと試みたるも、その報告は皮相の吟味に局限せられたり) その他の人々による同種研究同様 Query の述作は人の道德に關し、照明せる所ありとしても間接に然るのみたりき、氏は佛の諸地方に於ける刑事被告人數をその人口と比較したり、氏は又兵役に徵募されたる人にして、讀み且書き得る者の數と、讀むことを解せる刑事被告人數との照應を發見せんとしたり、氏は又

6) cf. v. Mayr, op. cit., S. 329; Öttingen, op. cit., S. 24 u. S. 5; Haushofer, op. cit. S. 17; Westergaard, Contributions etc. p. 160; R. Michels, Sittlichkeit in Ziffern? '28 S. 1.

特に財産に對する犯罪の事例にありては、再犯の甚だ繁きを注目したり、兎に角由來道德統計材料に究め及ぼすも、形而上學的思潮に先だたれ、その事實解釋上科學的精察の原則より逸出するの嫌ひありしが同じ研究範圍は Guerry 以來専門統計學者の大多數により、本來の科學的研究範圍内に包擁せらるることとなれり、そは人間社會生活の諸狀態及變動を深く探究し、かくて人間共同體の觀察及判斷を、統計學の學問的物體としてその腦裡に浮ぶるに至れりとの意味にて然り、唯前にも言及せる如くケトラー及その後繼者は、道德統計による理論の斷定を急ぎ、根據不充分又不確實なる材料に基づき、幾何の批判をも挿ますして法則の速斷に趨れるの嫌多く、又その規律嚴なるを輕信するの狀ありしに反し、Guerry の流れを汲める統計學極主實派 Realistische Richtung は、かかる結果を以て同種狀態及原因の認識及解釋の用に供せらるべき、諸常例の循環視するに過ぎざりき、而して Westergaard が此研究範圍に關し、先づ合理的諸原則が確實に守らるゝに至りしは、嚴密の意味にて所謂生死統計にありても遲緩たりしが、道德統計にありてはその嫌ひ一層大なり、その定義不良の譏りは醫事統計同様免がれざりし所なれど、兎に角その研究範圍内に自殺、犯罪、賣淫、私生、離婚等の諸題目を含むは、一般に承認されたりと汎言しつゝ、そは次の時代に引續きて夥しき述作を生み、又幾多現象の常例されし諸結果が世間一般の注意を引きしは怪しむに足らざるも、その題目の人氣は幾多の作家を之に喚ぶに至り、夫等の徒は他の諸題目を議しては、世に重きをなし得べかりしも、統計學者としては生嚙りを免がれざりきとして、

評論せる所敬聽を値ひせり、惟へらくその方法は間々曖昧たり、その材料は間々批判を挿むの念なくして蒐められ、又結果の解釋は多くの場合に根據薄弱たり、事實上その觀想せる所多くは、之に深淺の別は存し乍ら色々間接象徴視し得べきものに過ぎざりき、例令ば一教會に屬する人々の數は確かめ得べきもその一象徴によりては夫等の人々の内面的宗教生活を、立證し得ざるにより一斑を察すべきが如し、而も亦之が研究上興味ある多くの點に付、安全なる結論に達せんこと不可能に非ず、Nelson, Querry, その他の學者が、犯罪の研究に當り之を教育その他の諸事情に結び付けしは、優良の成績を擧げたりとはせざるも、此範圍の諸現象には眞面目なる計算を施すべし、例令ば生命表の作製に倣へる研究の如きは然り、唯その研究上諸事實につき、不偏なる一解釋を下すに大困難を告ぐ、諸述作者は一己の私見により煩はさること餘りに頻繁なり、即ち論敵が全く別箇の見地より解釋すべき諸事實たるに拘はらず、不知不識自己の意見を支持すべきものとして之を引くこと屢々なりと、先人に對する評論としては素よりなると共に、此方面に關する研學上の津梁としても亦重んずべきに非ずや。(本誌第十九卷一八五頁以下參照) つゞく。

7) cf. Westergaard, op. cit., pp., 166, 232; Meitzen, op. cit., SS. 66, 67.